

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第8回】疑問（疑問代詞「何」）

1. 疑問代詞とは？

疑問の形を学ぶ上で、疑問代詞は避けて通れない。

ん？ 代詞？ 代名詞じゃないのかって？

うん、君らはそう考えても、まあいいかな。

そもそも代名詞ってのは、人とか事物とか方向、場所を表す名詞の代わりに、直接指し示すのに用いる語
だろ？

たとえば、太郎の代わりに「彼」（人代名詞）とか、教室を指して「そこ」（指示代名詞）とかさ。

疑問を表す代名詞は、不定称の代名詞で、「だれ」などの人代名詞、「どこ」などの指示代名詞があるね。

ところが、中国語という代詞は、名詞の代わりだけでなく、「こう」とか「どう」とか、「なぜ」のように、動詞や形容詞、副詞なんかの代わりも用いられるんだ。

だから、名詞に代わる代名詞ではなく、「代詞」と呼んでるんだね。

でも、最近「なぜ」の意の疑問代詞を、疑問副詞と呼んだりすることもあって、学者によつては品詞を変えて説明したりすることがある。

だから、そのほうがわかりやすいなら、君らも「何^{なん}」（なぜ）なんかは疑問副詞って考えてもいいんだ
ぜ。

え？ めんどくさい？ ははは…じゃあ疑問代詞ってことで…

つまりは、**疑問代詞ってのは、「なに」とか「だれ」とか、「どこ」とか「どれ」などの不定称の代詞**
ってことになる。

それを使って疑問を表すわけだ。

疑問代詞には色々あるんだが、それを全部紹介すると、途方もない時間がかかる。

だから、この講義では代表的なものをいくつか紹介することにするね。

2. 疑問代詞「何」の用法

疑問代詞のトップバッターは、なんといっても「何」だね。

「何」単独で用いられることも、他の名詞や前置詞と共に用いられることもある。
用いられ方によって読み方も色々ある。

何^{ナニ}貴^{カミ}、何^{ナニ}賤^{セン}。

▼何^{ナニ}か貴^{カミ}くして、何^{ナニ}か賤^{セン}き。

▽（商品の値段は）なにが高く、なにが安い。

これは疑問代詞「何」が主語として用いられている例、要するに「なにがどうする」「なにがどうだ」「なにがなんだ」の「なに（が）」だよ。

この例文は「何が高く、何が安い」という意味だけど、「なにが」とは読まず、「なにに力」と読むんだ。
不定の事物を指して問いかけてるんだね。

地震^{チク}者^ハ、何^{ナニ}動^{ユル}地^{カス}也^ヤ。

▼地震^{チク}とは、何^{ナニ}ぞや。地^チを動^{ユル}かすなり。

▽地震とはなにか。大地を動かすのである。

これは「何」が述語で用いられる例、つまり「なに（か）？」だ。
これも「何」は不定の事物を指して問いかけてる。

このように単独で述語となる場合、また、語気詞「也」を伴い「何^{ナニ}也^ヤ」の形をとることがある。

ちなみに「也」は疑問の語気詞だというのが定説だけど、ためぐち先生はたぶんそうじゃないだろうって
思ってる。

「なにか？」というよりは「なんだ？」って感じじゃないかな。

述語に「何」が単独で用いられる場合は、「なんぞ」または「なんぞや」と送り、語気詞を伴う場合は、
「ゾ」を送って、語気詞自体を「や」と読む習慣だ。

ただし、気をつけてくれよ、ここでは「なんだ？」の意味だけど、述語が「何^{ナニ}也^ヤ」の形をとる場合、「
なにか？・なんだ？」の意味よりは、次の例のように「なぜか？・なぜだ？」の意味を表すことの方が圧倒
的に多いからね。

寡^{コウ}人^{ニヒ}有^{アル}哀^{アイ}、子^コ独^{ドク}大^{ダイ}笑^{セウ}何^{ナニ}也^ヤ。

▼寡^{コウ}人^{ニヒ}哀^{アイ}しむこと有^{アル}に、子^コ独^{ドク}大^{ダイ}に笑^{セウ}ふは、何^{ナニ}ぞや。

▽私は悲しんでいるのに、あなたがひとり大いに笑うのは、なぜか。

この例、実はこんなお話。

春秋時代、斉の景公が泰山つて山で酒宴を開いて、まさにたけなわの頃、周囲の領地をぐるっと見渡して、はらはら泣いたんだよ。

「私はいずれこの大国を去って、死んでいくことになるのであろうかな」ってさ。

そしたら左右の側近たち3人が景公の悲しみに同調して、「私どものようなつまらぬ者でも死ぬのは嫌でございます。ましてわが君におかれましてはなおさらでございますよう」って泣いたんだよ。

ところが名臣として名高い晏子だけは、両手で自分の股を叩いて、大笑いしたんだよ。

それで、むっとした景公が言ったのが、右の言葉。「わたしが悲しんでるのに、そなたひとりが大笑いするのは、なぜだ！」ってね。

これに対する晏子の答えは強烈だよ。

「今日、私は臆病な君主1人と、媚びへつらう家臣3人を見ました。それで大笑いしてるのでございませう」ってね。

人は誰しも死ぬんであつて、だからこそ昔の王者は亡くなって、今景公がこの国を治めている、物事は定めがあるのであつて、老いてなお死を悲しむのは臆病者、その王の悲しみを助長するのは媚びへつらいだというわけ。

さすが、霊公、莊公、景公の3代に仕えて、諫言を恐れず国を治めた名宰相だよ。

さて、ここでは「何」は理由や原因を問い、「なぜか」という述語として用いられているんだ。

語気詞「也」を伴う「^い何也」の形は「^いは、なぜか」の意味で頻繁に用いられるので注意。

そして、このように「なぜ」という意味を表す「何」も「どんな理由」という意味の代詞に含まれるんだ。

◎ポイント……疑問代詞「何」は、文の主語となる場合は「なにが」、述語となる場合は「なにか」「なぜか」という意味を表す。

何^カ A^{スル} ・ 何^カ A^{ナル} ▼何^{なに}がAする。 ・ 何^{なに}がAなる。 ∴「何」は主語

▽何がAするか。 ・ 何がAであるか。

A^ハ 何^ニ ・ A^ハ 何^ニ 也。 ▼Aは、何^{なん}ぞ。 ・ Aは何^{なん}ぞや。 ∴「何」は述語

▽Aは、なにか。

A^ハ 何^ニ ・ A^ハ 何^ニ 也。 ▼Aは、何^{なん}ぞ。 ・ Aは何^{なん}ぞや。 ∴「何」は述語

▽Aは、なぜか。

主語や述語以外に、「何」が目的語として用いられることもあるぞ。

この場合は、語順に注意だ！

大王来何操。

▼大王来たるに、何をか操る。

▽大王がいらつしやる時、なにを持ってこられたか。

「何」はここでは「なにを（持ってきたか）」と事物を問うてるんだね。

つまり、述語「操る」の目的語として用いられてる。

あれ？「操る何」が本来の語順なんじゃないの？だって？

うん、確かに！

でも、「何」が述語動詞の目的語の時は、述語の前に倒置することの方が多くて、古代の漢語ではほとんどがこの形で用いられたんだ。

でもな、「操る何」の語順が絶対誤りというわけではなくって、実際倒置されてない用例だってあるんだぜ。

え？あたしは必ず倒置するって習ったって？うん、そういうことを言ったり書いたりしてる人もあるよね。

でも、それはちゃんと用例を調べずに、他の本を引き写したり、書いてあることを鵜呑みにしたりしてる先生なんだよ。

時代にもよるけど、確かに古代の漢文では、目的語が疑問代詞の時は、述語の前に倒置するのが普通だ。それは、問いたい内容を先に示して強調しようとするためなんだろうね、それが標準的な語順に定着したんだろ。

県名為何。（県名為何。）

▼県名は何たる。（県名は何と為す。）

▽県の名はなんであるか。

この例文、倒置されてないだろ？

この「何」は、ここでは判断文の述語動詞「為す」（〜である）に対して「なに」という意味の目的語として用いられてる。

この場合は目的語でも述語の前に提示されることはないんだ。

これに類するものとしては、「謂何」（なんというか）があるけど、これも倒置しない。

訓読では「為何」の形で「なんた」と読む方が語法的には正しいんだけど、よく「なにトナス」と読まれるね。

用例は少なくても、倒置されないこともあるってことは、知つてくれ。それに、時代が今に近づけば、その数はもっと増えるよ。

◎ポイント……疑問代詞「何」が目的語「何を(どうする)」となる場合は、通常、述語動詞の前に置かれる。

何^ヲ A^ニ

▼何をかAする。

∴「何」は目的語

▽何をAするか。

・まれに倒置しないこともある。

・また、「為^ル何^ニ」(何であるか)・「謂^フ何^ト」(何というか)の場合は倒置しない。

「何」が「なに」以外の意味を表すこともあるぞ。

たとえば、「何」が複数あるもののうち、「どちらを」とか「どれを」という意味を表すこともあるんだ。

必^ズ不^レ得^レ己^ヲ而^テ去^リ於^ニ斯^ニ三者^ニ何^ヲ先^ニ

▼必ず己むを得ずして去らば、斯の三者に於て何をか先にせん。

▽もしどうしてもやむを得ず取り去るとすれば、この三者の中でどれを先にしますか。

孔子に政治を行う上での大事なポイントが兵(軍事)・食(経済)・信(道徳)の3つと教えられた弟子の子貢が、さらにつきつめて、そのどれが一番大切かを知るために問いかけた言葉だ。

目的語の「何」は、そのまま「何を？」という意味を表しているとも解せけど、3つのうち「どれを」と選択を問うているとも解せるだろ？

これも目的語の疑問代詞「何」を述語「先」の前に置いて示したもの。

訓読では、「なにヲカ」「いづレヲカ」の2つの読み方がある。

この例も「何^ニ先^ニ」と読んでもいいんだぜ。

ところでこのお話、山岡荘八という小説家が『徳川家康』の中で、まだ幼くて竹千代と呼ばれた家康と師の雪斎のエピソードとして描いている。

これがなかなかおもしろいんだ。

雪斎に「兵・食・信」の1つしか選べないとすれば、どれを捨てるかと問われて、竹千代は「人は食べ物

がなくては生きられませぬ。が、槍は捨てても生きられます」と、「兵」とこたえる。

その次はどれを？と問われて、竹千代は食がなければ生きられないから、「信」とこたえたんだ。

そしたら師の雪斎、「わずかな『食』を分け合うには『信』がいる。信じあえるゆえに人間なのじゃ。人間がつくっているゆえ、国というが、信がなければ獣の世界。獣の世界では食があっても争いが絶えぬゆえ生きられぬ」という。

どうだい？ 君らなら、それを最初に捨てて、それを最後まで守り通すかな？ 考えさせられるだろう？

◎ポイント……「何^ヲ A^{スル}」の「何」が、「どちらを・どれを」という意味を表すこともある。

何^ヲ A^{スル}

▼何をか A する。

▽どちらを A するか。・どれを A するか。

∴「何」は目的語

・「何^ニ先^ニ」と読むこともある。

「何」が「どこに」という意味を表すこともあるぞ。

玄德公何在^ニ。

▼玄德公^ニ何^ニくにか在^ル。

▽玄德公はどこにいるのか。

「何」は、ここでは「どこに」と場所を問うてるんだ。

述語「在^ル」に対する場所を表す目的語だね。

中国ではこれを処所賓語っていう。つまり場所目的語だ。

この場合も、本来の語順は「在^ル何^ニ」だけど、目的語の疑問代詞「何^ニ」を述語の前に倒置してるわけだね。

でも、場所を表す「何」が述語に前置する例は先秦時代に多く見られて、漢代以降は、たとえばこの例なら、「何」を「何処」に改めて、「在^ル何^ニ処^ニ」などの形で述語の後に置かれる用例がしだいに多くなるんだ。

たとえば、「墓在^ニ何^ニ処^ニ」(▽墓はどこにあるのか)などがその例だね。

つまり、時代にもよるけど、このような倒置しない例はいくらかもあるんだよ。

訓読では、この「何在」の場合、「いづくにありや」と読まれることもあるぞ。

◎ポイント……「何」が「どこ・どこで」という意味を表すこともある。

何^{ナニカ} A^{スル}

▼何^いくにか A する。

▽どこに A するか。・どこで A するか。

…「何」は場所目的語

「何」は、「なぜ・どうして」の意で、述語を連用修飾すること多い。

夫子何^{ナニ}哂^{わら}由^{よし}也。

▼夫子何^{なん}ぞ由^ゆを哂^{わら}ふや。

▽先生はどうして由（＝孔子の弟子子路）をお笑いになったのですか。

「何」ここでは「なんぞ」と読んで、「なぜ・どうして」と理由や原因を問い、述語を連用修飾してる。このような用いられ方をするから、代名詞といわず代詞というんだが、疑問副詞と考えてもいいぜ。理由や原因を問う「何」は、述語の直前に置かれるのが一般的だね。

◎ポイント……「何」が「なぜ・どうして」という意味を表す時、副詞のように述語の前に置かれて、述語を連用修飾する。

何^{ナニ} A^{スル}

▼何^{なん}ぞ A する。

▽なぜ A するのか。・どうして A するのか。

…「何」は連用修飾語

最後は、「何」が名詞を連体修飾する働きだよ。

毛詩、何^{ナニ}句^カ最^も佳^い。

▼毛詩、何^{なん}れの句^くか最^も佳^いき。

▽毛詩（＝詩経）では、どの句がもっともよいか。

この例の場合、「何」は選択疑問を表していて、名詞「句」を連体修飾して「どの句」という意味を表してる。

だから「いづレノ」と読んだわけだ。
もちろん「なんの？」という意味でも用いられて、その場合なら「なんノ」と読む。

◎ポイント……「何」は「なんの・どの」という意味を表して、名詞を連体修飾する。

何_レ A ▼何_んの A …「何」は連体修飾語

▽なんの A

何_レ A ▼何_れの A …「何」は連体修飾語

▽どの A

他にたとえば、「為_レ何_ん言_レ邪_か」（▼何の言たるか）で、あなたの読んでいるのは「だれのことばですか」という意味を表すこともあって、「何」が「だれ」の意味を表す場合もある。

でも、「何」が即「だれ」というのではなくて、そうとれるような用いられ方をすることもあってことだろうな。

「孟子者、何_ん昭公_も夫人也」（▼孟子は、何ぞや。昭公の夫人なり）なんて例もあって、これなんかは「なんぞや」と読むとおかしいから、「たれぞや」と読むで。

でも、これも、用いられた状況から「だれ」の意味を表していると考えるべきだろうな。

「何」と同様に用いられる語には、他に「曷」「奚」「胡」などがあって、かなり頻繁に用いられるから注意してほしい。

「曷」は、「なに（曷_ん）・いつ（曷_{いつ}）・なぜ（曷_{なぜ}）・なんの（曷_{なん}）・どの（曷_{どの}）」などの意味と読みで用いられる。

「奚」は、「なに（奚_{なに}）・どこ（奚_{どこ}）・なぜ（奚_{なぜ}）・なんの（奚_{なん}）」などのように用いられる。

この2つの字はいずれも「何」の用法に近いものだね。

それに対して、「胡」は、「なに（胡_{なに}）・なぜ（胡_{なぜ}）」の意味で用いられて、「曷」「奚」よりは疑問代詞としての意味は狭い。

これらは、このあと「何」の例で説明するように、他の名詞と共に用いられたり、前置詞の目的語となつて疑問の前置詞句となることもある。

だけど、それを説明しだすと、もつめっちゃ煩雑になるんで、「何」と同様に用いられるんだと思つてくれ。

3. 疑問代詞「何」が名詞とともに用いられる用法

「何」は単独で用いられるだけじゃなく、他の名詞とともに複合して用いられることもある。たとえば「何処」(どこ)とか「何時」(いつ)とかね。

これは早い話が、前で述べた「何」Aと同じなだけど、ひとつの複合疑問代詞として用いられるんで、ここに取り上げておこう。

まずは、「何処」や「何許」が「どこに・どこで・どこから」という場所を問う用法だ。

何^レ処^カ宿^ム。

▼何^レれの^レ処^カにか^ニ宿^ムる。

▽どこに泊まっているのか。

疑問代詞「何」と名詞「処」(ところ・場所)からなる「何^レ処^カ」は、「どんな場所」から「どこ」という意味で場所を問う。

ここでは述語「宿」に対して「何^レ処^カ」が目的語になるので、述語の前に倒置されてるね。ただし、前にも言ったように、漢代以降の文では倒置されないこともあるよ。

目的語になる他に、「何^レ処^カ人^ニ」(どこの人)のように名詞を連体修飾したり、「く^ハ何^レ処^カ」(くは、どこか)のように述語として用いられることもある。

訓読では普通「いづレノところ」と読んで、君らが普通読んでいるように「どこ」とは読まないんだ。この読み方、けっこうよく問われるから、くれぐれも注意しといてくれよ。

何^レ処^カ来^ル。

▼何^レれの^レ処^カより来^ルたる。

▽どこから来たのか。

これは「何処」が「どこから」という意味を表してる。だから、「いづレノところヨリ」と読むんだね。

この「どこから」は、起点を表す前置詞「從」「自」を用いて、「從^レ何^レ処^カ来^ル」とか「自^レ何^レ処^カ来^ル」と表現されることもある。

その場合、「從^レ何^レ処^カ」「自^レ何^レ処^カ」は前置詞句になるんだが、「何^レ処^カ」単体でも、述語「来」の目的語として「どこから」という意味を表し得るんだよ。

他にも「何処」は、いろいろな用いられ方をするんだが、いささかくどいんで、次のポイントにまとめておくから、目を通しとけ。

◎ポイント！…「何処」は場所を問い、「どこ」という意味を表す。

何_レ 処_ニ A_ニ

▼何_レの_ニ処_ニにかAする。

▽どこに「_ニ」で「_ニ」Aするのか。

何_レ 処_ニ A_ニ

▼何_レの_ニ処_ニよりAする。

▽どこからAするのか。

何_レ 処_ニ A

▼何_レの_ニ処_ニのA

▽どここのA

A_ハ 何_レ 処_ニ

▼Aは何_レの_ニ処_ニぞ。

▽Aはどこか。

「どこ」という意味を表す複合疑問代詞は、「何_レ 処_ニ」のほかに、「何_レ 所_ニ」「何_レ 許_ニ」がある。

「何_レ 所_ニ」は「いづれ_ニとところ」と「何_レ 処_ニ」と同じように読む。

一方、「何_レ 許_ニ」は、「いづれ_ニ」と熟して読むのが一般的な訓読だね、覚えといてくれ。

え？どっちかに統一しろって？ 昔の人に言ってくれ。

「何_レ 処_ニ」は場所を問う複合疑問代詞だが、それと似た読み方をして、時を問う複合疑問代詞がある。

うん、「何_レ 時_ニ」だよ。

え？「いつ」って読むんじゃないのかって？ いや、それが違うんだ。

じゃあ、「なんじ」かって？ 似た読み方って言ったろ！ それ、却下。

趙 何_レ 時_ニ 亡_ニ

▼趙何_レの_ニ時_ニにか亡_ニがくる。

▽趙の国はいつ滅びるのか。

「何_レ 時_ニ」は疑問代詞「何」と名詞「時」からなり、「いつ」という意味で時を問う。

ほとんどの例が、述語を連用修飾して「いつ」という意味で用いられるんだ。
また、「いつ、何時」「いつは、いつか」のように述語となる場合もあるね。
さっきの君みたいにな、どうしても「いつ」と読みたくなるんだが、訓読では「いつレノとき」と読む。
いいか？ ちゃんと覚えとけよ！

時を問う「何時」に似た表現には、ほかに「何日」「いつ（の日）か」や「何年」「いつ（の年）か」などがある。

見りや意味はわかると思うけど、読み方には注意だね。

◎ポイント……「何時」は時を問い、「いつ」という意味を表す。

何時 A。

▼何れの時にか A する。

▽いつ A するのか。

A 何時。

▼Aは何れの時ぞ。

▽Aはいつか。

「何」が名詞「故」（ゆゑ・理由）と複合した「何故」は、「なぜ・どういう理由で」と原因・理由を問う。

これも君らが「なぜ」って読んじゃう危ない複合疑問代詞だな、そう読むんじゃないんだぜ。

何故殺宰相。

▼何の故に宰相を殺せる。

▽なぜ宰相を殺したのか。

え？ ためぐち先生の出す例は、人が殺されるのが多すぎるって？

すまん、すまん。わかりやすい例ってことで勘弁してくれよ。

で、「何故」は、「なんノゆゑ」って読むんだ。「なぜ」じゃないんだよ。

この例のように述語を連用修飾して「なぜ（か）」という意味を表すほか、「A、何故」「（Aは、なぜか）のように述語となることもある。

また、「いつ、何故」「（いつは、なぜか）のように、主語を伴わず単独で用いられることもあるぜ。

◎ポイント!…「何故」は原因・理由を問い、「なぜ・どういつ理由で」という意味を表す。

何故_{何故} A_{何故}

▼何_何の故_{何故}にAする。

▽なぜAするのか。

A_{何故} 何故_{何故}

▼Aは何_何の故_{何故}ぞ。

▽Aはなぜか。

4. 疑問代詞「何」が前置詞とともに用いられる用法

「前置詞は、その目的語の名詞とともに前置詞句を作り、述語の前に置かれた時は、述語を連用修飾する」、これが前置詞理解の大前提だったよな。

たとえば「以_以杖_杖叩_叩其_其脛_脛」(▼杖を以て其の脛を叩く)だったら、「以_以杖_杖」(杖で)が述語「叩_叩」を連用修飾してるわけだ、ちょうど副詞のようにね。

「杖」は前置詞「以_以」の目的語の名詞で、「以_以」の後に置かれて「以_以杖_杖」の形で前置詞句って言ったね。

さて、その目的語が疑問代詞「何」の場合にはどうなるか。

うん、そう、疑問代詞が目的語の場合は、目的語が倒置されるのが普通だったろ?

つまり、「何_何以_以」になるわけだ。

何_何以_以治_治魯_魯。

▼何_何を以_以て魯_魯を治_治むる。

▽どうやって魯_魯の国を治めますか。

「何_何以_以」には、前置詞「以_以」の働きによって複数の意味があるんだよ。

ここでは「以_以」が「_をを用いて・_で」という手段を表しているの、**「何_何以_以」は「何を以て・どう**

やって」の意味で用いられている。

つまり、魯_魯の国を治める方法を「どうやって?」と問っているわけだね。

「何_何以_以」は「以_以何_何」の疑問代詞「何」を倒置したもので、普通はこの形で用いられる。

でも、必ずそうか?というと、実は倒置されない場合だってあって、たとえば曹植の『善哉行』って詩に、

「以^イ何^カ忘^シ憂^ニ、彈^キ箏^ニ酒^ニ歌^ハ」(▽何によって憂いを忘れようか、琴を弾き酒を飲んで歌おう) であるように、例は少ないにせよ、倒置されないことだつてあるんだぜ。

前にも言ったように、疑問代詞が目的語の場合は必ず倒置されるってよく言われるけど、例外もあるってことを知つてくれ。

何以^{イニ}卑^{シム}我^ヲ。

▼何を以て我を卑しむ。

▽どうして私を見下すのか。

前置詞「以^イ」は「を理由に・で」と、原因・理由を表すこともあるよな？

だから、この「何以^{イニ}」は「なぜ・どうして」と理由を問う意味を表すんだ。

ところでこの「何以^{イニ}」は、「なにをもつて」と読むんだが、「なんぞもつて」という読み間違いが多い。

実際、読みが問われることもあるから、きちんと覚えとけよ。

◎ポイント……「何以^{イニ}」は手段や理由を問い、「なぜ・どうという理由で」という意味を表す。

何以^{イニ} A^{スル}。

▼何を以て A する。

▽①何を用いて A するのか。・どうやって A するのか。(手段・方法を問う)

②なぜ A するのか。(理由を問う)

・「なにをもつて」と読む。「なんぞもつて」と読まないように。

「何以^{イニ}」と同じ意味を表すものには、「何^ニ用^フ」が(何を)用(て)ある。

また、これらと似た意味を表すものとして、理由や事情を表す前置詞「由^ユ」が疑問代詞「何」を目的語にする「何^ニ由^リ」(何に由(り)て(か)(が)、「何によって・どういう事情で・なぜ」という意味を表す)ともあるぜ。

さらに、「何^ニ自^リ」(何に自(り)て(か)(も)何^ニ由^リ)と同じ意味を表すんだが、こいつはちょっと要注意だ。

っていうのはな、この前置詞「自^リ」は、「由^ユ」のように理由や事情を表すこともあるけど、違う意味で用

いられることが多いだろう？

え？ 起点ですか？ だって？ そう！ 君、よくわかってるじゃないか！

「**自**」故郷**来**」(▼故郷より来たる)って、「故郷から来る」って意味だよな。

この「**自**故郷」は、起点を表す前置詞「**自**」が「故郷」を目的語にとってるけど、この「故郷」を疑問代詞「**何**」に変えると、「**自何**」の「**何**」を倒置して「**何自**」になる。

これは当然「どこから」という意味になるから、「**何自**」と読むわけにはいかない。

「どこから」なんだから、「**何自**」(何れより)って読むんだよ。

病**何自至**哉。

▼病**何れより至**るや。

▽病気はどこから来たのか。

「**何自**」は、前置詞「**自**」の意味により、「どこから」(場所の起点を問う)、「いつから」(時の起点を問う)の2つの意味で用いられる。

でも、場所を問う例が多いかな。

この例でも、病気がどこから来たのかという場所の起点を問うてるんだね。

ところで、この意味の場合は、「**自**」は日本語の格助詞「より」と読んでるから、書き下し文では平仮名にする。

さっきの「**何自**」「の**自**」は「よる」という動詞の連用形として読んでるんだから、「**何に自りて**(か)」と漢字で残す。

ややこしいけど、それが書き下し文にする際の約束ごとだったろ？ 気をつけて！

◎ポイント！…「**何自**」は、前置詞「**自**」の働きにより、2つの意味を表す。意味によって読み方が異なるので注意。

何自 **A**。 (何れより A する)

▼**何に自りて**(か) **A** する。

▽何によって **A** するのか。 ・ どのような事情で **A** するのか。
(事情や理由を問う)

何自 **A**。 (どこから A する)

▼**何れより** **A** する。

▽どこから **A** するのか。 ・ いつから **A** するのか。
(場所や時の起点を問う)

「何_レ以_テ」と並んで、よく用いられるのが「何_レ為_レ」だ。

これは熟して「何_レ為_レ」（なんすレゾ）と読む。

こいつの読みを問う入試問題は、過去をさかのばれば膨大な数になるんじゃないかな？
まず、読み方を頭に入れていってくれ！

嫗_レ子何_レ為_レ見_レ殺_ス。

▼嫗_レの子何_レ為_レれぞ殺_スさるる。

▽あなた（＝老婆）の子はどうして殺されたのか。

「何_レ為_レ」は前置詞「為_レ」（為_ニに）が疑問代詞「何_レ」を目的語にとる形。

つまり「為_レ何_レ」（何_ノの為_ニに）の「何_レ」が倒置して「何_レ為_レ」の形をとってるわけだ。

したがって「何_レ為_レ」は「なんのために・どうして」という理由を問う意味を表す。

え？「何_ノの為_ニに」と読めばわかるのに、なんでわざわざ「なんすレゾ」と読むのかって？

いい質問だねえ… その質問は、実は「何_レ為_レ」のなりたちを考える上での大きな問題に拘わってるんだよね。

でも、ためぐち先生としては、そのことを語る前に、この例文の「嫗_レ」（老女）の話がしたい。
え？先に何で「なんすレゾ」と読むのか説明してほしいって？

わがまま言うなよ、先生は「嫗_レ」の話がしたいんだ！

後に項羽を倒して漢王朝を築き上げた劉_レ邦も、最初はただのならず者同然だったんだな。

それが壮年になって、ようやく亭長になった時のこと。

え？亭長って何だったって？ うん、秦の時代の法で、10里ごと（今の4km強ってところかな）に一亭を置いて、

亭長に運営させたんだ。

亭ってのは、いわば宿駅だな。

亭長はその官吏と、一種の警察官みたいな仕事を担ってたんだよ。

ま、それなりに劉邦の人望を背景にしてたってわけ。

この頃の劉邦にはいくつか不思議な伝説みたいな事件があつて、この老女の話もその一つだ。

亭長だから上からの命令には従わなきゃならないんだが、土木工事に従事させるために強制労働の人夫を送り届けろって言われて、連れて行く途中、人夫がどんどん逃げちゃう。

こりやだめだつてことで、劉邦は自分も逃げることにして、残ってた者たちに、「おまえら逃げろ、俺も逃げるし」って言うんだ。

そしたらその温情に感動した男気のある人夫たち十数人が、自分たちも劉邦について行くって言ったんだ。さて、その道中のある夜、劉邦が酒をあおって小道を抜けていく時、一人を先に行かせたところ、そいつが帰ってきて、「前に大蛇がおりまして、道をふさいでるんで通れません。引き返しましょう」と報告する。

劉邦は酔っ払い気分で、「壮士が行くのだ、何の恐れることなどあるもんか！」と豪語して、そこ行つて剣を抜き、大蛇を斬り殺しちゃう。

そしてそのまま開かれた道を進んで行つたんだけど、さすがに酔いが回って地べたに転がつて寝ちゃう。そのうちに追いついてきた後から来た者が妙な報告をする。

劉邦が大蛇を殺したところにさしかかると、そこに一人の老婆がいて、大声で泣いている。

「なんで泣いてるのか？」と問うと、その老婆、「人が私の子を殺したので、泣いているのでございます。」

さらに「老女の子は、なんで殺されたのか？」と問うと、老婆は「私の子は白帝の子で、蛇に化けて道に横たわつておりましたが、いま赤帝の子に殺されました。だから泣いているのでございます。」

これ、嘘やろ？と思った人が老婆を鞭打とうとしたら、老婆はふっと消えてしまったんだ。

この話を聞いた劉邦は、心の中でひそかに喜んだんだ。

だって、白帝は秦の国が祀る神だよ、ってことは、それを斬った自分が赤帝ってことになるからな。

この事件のおかげで、従者たちはますます劉邦を畏敬したってわけ。

「いかにも怪しい話だなあ」って、まあ確かにな。

え？ そんな怪しい話より、早く何で「何為」を「なんすレゾ」と読むのか説明しろって？

おい、君らな、文法だけ理解して、何が楽しいんだ？ だから漢文嫌いな奴がたくさん出るんだよ。

漢文は宝の山みたいなものだぜ、昔のいろんなお話があつて、いろいろ考えなくなる、だから楽しいんじゃないか。

試験で点数とるためにやるんじゃない、先人の文化に触れるために学ぶんだよ！

で、その「なんすレゾ」なんだが…

さつき、ためぐち先生は「何為」が「為」何」の倒置だと言つたじゃないか。

でも、そうじゃないかもしれないんだよ。

現在の中国では、そう考えられてるけど、6世紀末に書かれた経書（儒学の教えを記した書物）の、字の発音と意味を記した『經典釈文』って書物によると、「ために」という意味を表す「為」には動詞の「なす」と区別するために、必ず注がついてるのに、「何為」にはついてないんだよ。

ってことは、「何為」の「為」は、少なくとも「ために」の意味ではなくて、あるいは動詞かも知れんってことになるだろ？

これを見た昔の日本の学者が、「何為」の「為」は「なす」（する）という意味なのかって考えたのかもな。

それで、「何為れば」（何をすれば・何をするから）ぐらいの意味で受けとつたのかもしれない。

あるいは初めはその意味だったのが、しだいに「為」（する）の意味が薄らいで、ほぼ「何」（なぜ）の意味で用いられるようになったとも考えられるね。

このあたりの真実はまだはつきりしないというべきか。

ただ、「なんすレゾ」という読みは、「なにすればぞ」と同じ意味だと思うけど、奈良時代やそれ以前の

文法では、条件を示す場合、活用語の已然形の後に「ば」を伴わずに、後に「ぞ」を添えたものも見られてね。

それが、その後も「なにすれぞ」が「なんすれぞ」になって、今に残ってるわけさ。

◎ポイント……「何為^レ」は、「なぜ・どうして」の意味で用いられる。「なんすれぞ」と熟して読むの
で注意しよう。

何為^レA^{スル}

▼何為^んれぞAする。

▽なぜAするのか。

(原因・理由を問う)

ところで、見かけ上「何為」の形をとっていても、「為」が「する」という意味をもつ動詞で、「目的語」「何」＋述語「為」の構造で、「何為^{カス}」(なにをするのか)という意味の場合もあるぜ。

何事も思い込みは禁物！ちゃんと文脈から判断しなきゃならんよ。

それに関係して、もう1つ覚えておいてほしい形があるんだ。

「何為^ル者^者」(何為^ルる者^者ぞ)で、「(おまえは)なにものだ」って意味。

これは、相手の素性や身分・職業を詰問する場合に使った。

やや蔑^{あざ}んだ調子を帯びた疑問表現でね、さしずめ時代劇なんかによく出てくる「なにやつ！」って感じかな。

これはもちろん本来「何をか為^ス者ぞ」だね。

それを「なんするものぞ」と読む習慣があるんだ。

「何為^ル」とは構造は違っただけど、似たような熟した読み方をするということを覚えておいてくれ。

5. 疑問代詞「何」が動詞とともに用いられる用法

疑問代詞「何」のさまざまな用いられ方を紹介してきたけど、その最後が動詞と共に用いられる形だ。それを紹介する前に、まず理解してほしいのが、「ごとし」と読む語の本当の意味だよ。

「『ごとし』って、『如^{ごと}し』でしょ？」って？ そうそう、「若^{ごと}」も「若^{ごと}し」って読むね。

で、それってどういう意味？ うん、たとえば「汝^な顔如^{ごと}猿^{さる}」(▼汝^なの顔^{かほ}猿^{さる}のごとし)は？

そうそう、「あなたの顔は猿のようだ」(失礼な！)って意味だよ。

つまり、「如^{ごと}」や「若^{ごと}」は「ごとし」と、日本語の比況の助動詞として読まれて、「(くの)ようだ」と解釈されてるわけだ。

でもな、実はこの「如^{ごと}」や「若^{ごと}」は、古典中国語では「似る」に近い類似を表す動詞なんだよ。

だから、「汝顔如猿」は、「あなたの顔は猿に似る」（失礼な！）つてのが本来の意味なんだよ。
疑問代詞「何」の最後の用法が、この「如」や「若」と共に用いられる形さ。
とはいっても、「ごとし」とは読まないんだけどね。

今日之事、何如。

▼今日の事は、何如。

▽今日の事態は、どうであるか。

先に秦を破って都の咸陽に入ったために、項王の激怒にあった劉邦、ほぼ丸腰に近い状態で鴻門に謝りに来たというお話は、「鴻門の会」としてあまりに有名。

項王の参謀范増の指示で、項王の従弟の項莊が剣舞をして劉邦の命を狙ったんだったよね。

こりゃあかんと、主人の危機をなんとか打開するために、劉邦の参謀の張良が軍門まで樊噲に会いに来る。そこで樊噲が張良に尋ねて言った言葉がこの例文。

授業では「今日のことはどうですか？」と訳すと習ったんじゃない？

そして、「何如」は「いかん」と読んで、「どうであるか」と状態を問うと教わったろ？

さて、この「何如」の正体は、実は「何に似るか？」だよ。

あえて「如」を「ごとし」と読めば、「何のごとき」となる。

「何」は動詞「如」の目的語の疑問代詞だから、倒置されて「何如」になるわけさ。

「何に似るか」がもともとの意味だけど、それはつまり「どのようなものであるか」という意味になるだろ？だから熟して「いかん」と読んだわけ。

つまり、「何如」は形容詞性の疑問の意味を表して、様子や状態・評価を問うんだ。

「く、何如」（くは、どうであるか）の形で、述部に多く用いられるね。

子反曰、「子之国、何若矣。華元曰、億矣。」

▼子反曰はく、「子の国は、何若。」と。華元曰はく、「億れたり。」と。

▽子反が言うには、「あなたの国はどんなありさまですか。」と。華元が言うには、「疲弊しています。」と。

「何若」も「何如」と同じだね。

「若」も「似る」に近い意味の動詞だから、これも「何に似るか」というのがもともとの意味。

「何如」と同様に「何」が倒置されているんだ。

したがって、「何若」も形容詞性の疑問の意味を表して、様子や状態・評価を問うんだ。
この例でも、「あなたの国は、何に似るか」が「どんなようですか」となるわけ。

「何如」や「何若」は、「どうであるか」という意味を表すから、それが名詞を修飾すれば「どのような」という意味を表すことになる。

たとえば、「何如時」（何如なる時）なら、「どんな時」という意味で、「何如時」と問いかければ、「は、どのような時か」から「は、いつか？」という意味を表すこともあるな。

また、「何如」や「何若」が条件を表して、「何如則」（何如なれば則ち）という形をとれば、「どうであれば」という意味にもなるわけだ。

そのあたりは、「何如」や「何若」が「どうであるか」という意味なんだと押さえておけばわかるはずだから、よろしくな。

◎ポイント！…「何如」「何若」は、形容詞性の疑問を表し、様子や状態・評価を問う。

A、何如。・A、何若。
▼Aは何如。・Aは何若。

▽Aはどうであるか。

何如A・何若A
▼何如なるA・何若なるA

▽どのようなA

何如則・何若則
▼何如なれば則ち・何若なれば則ち
▽どうであれば

・「何如而」「何若而」が「何如則」とほぼ同じ意味を表すこともある。

さて、「何」が「如」や「若」と共に用いられる形には、もう1つある。

これがまたちよいとややこしいんだ。

たとえば、「あなた」の処遇をどうすればよいか？…と問いたい時、漢文ではどのように表現するというと、「如汝何」（汝を如何せん）となるんだ。

ひょえ〜と言いたくなるだろ？なんでそうなるの？ってさ。

かりに「何」が「どうする」という意味だったとして、その場合でも「汝」は目的語なんだから、一番下に置いて、「如何汝」になるんじゃないの？って思いたくなるよね…でも、そうはならないんだ。

これは中国人にとっても特殊に思えるらしく、文法書なんかには特殊形式として扱われたりすることもある。

でもな、これもちゃんと説明できるんだよ。

まず、「如」はやつぱり「似る」という意味の動詞。

そして、「如汝何」は二重目的語の文なんだ。

述語「如」＋間接目的語「汝」＋直接目的語「何」の構造、つまり、「汝に対して何に似させるか」だよ。「似る」という意味の自動詞「如」が「汝」という目的語をとるために、使動態、すなわち使役の意味を帯びるんだ。

「汝に何を似させる」と言えば二重目的語の文だとわかりやすくなるんだが、「似る」の意の動詞は「くを似る」とは言わず、「くに似る」というから、「汝に何に似させる」になるわけ。

二重目的語の文では、述語動詞の後に2つ置かれる目的語のうち、「誰に」という意味を表す目的語を先に置くのが約束だろ？

だから、結果的に「汝」が「如」と「何」の間に置かれるように見えるんだよ。

さて、結論だ。

「あなたを何に似させようか」に対して、「部長に出世させよう」なら「部長に出世させることに似させよう」ということになる。

この理屈から、「如何汝」は「如_レ汝何_ニ」（▼汝を如何せん）と読んで、「あなたをどうしようか」という意味を表すことになるんだ。

日本語の話になるけど、「いかん」は「どう」って意味、「せん」は「しよう」だよな？

だから「どうしようか」と訳すんだよ。

そのあたりもきちんとわかって訳してくれよ。

結局のところ、「如_レA何_ニ」は、動詞性の疑問を表して、手段や方法を問うんだよ。

ただし、この形をとって「Aをどうしたらよいか？」という意味を表す時、必ずしも疑問とは限らない。むしろ「いや、どうしようもない」という反語の意味で用いられることが多いかな。

純然たる疑問を表す形は、次の形をとることが多いよ。

年_ニ饑_ム用_ニ不足_ム如_レ之何_ニ

▼年_ニ饑_ム、用_ニ不足_ム、之_ニを如何_ニせん。

▽凶作で、国費が足りないが、これをどうすればよいか。

「年」は年穀、つまり今年の穀物の収穫だ。

凶作で実りが少ないから、「用」（＝国費）が足りないんだよ。

魯の国の哀公にこの質問をされた孔子の弟子の有若は、現在収穫の10分の2の税を10分の1に減らしては

どうかと答えるんだ。

哀公は「10分の2の税でも足りないのに、なんでまた10分の1に減らすんだ！」と言っただけで、有若は「国民が満ち足りていれば、君主が苦しんでるのを放ってはおかない」と答える。

まあ、理想論だわな…

さて、理屈の上では、右の例は「如^レA何^ニ」の形にあてはめて、「如^ニ用^レ不^レ足^ニ何^ニ」と表現することも可能だし、そう表現されることもあるが、Aが2文字以上の例は極めて少ないね。

だから、まずどうしたいかという内容を先に述べて、それを「之」で受ける形をとることが多いんだ。

つまり、「A、如^レ之何^ニ」(▼A、之^ニを如何^ニせん)の形をとって、「A(については)、これをどうすればよいか」という意味を表すわけだ。

Aは、単なる名詞のこともあるし、右の例のように句の場合だってある。

要するに、あることについて手段や方法を問いたい時、まず主題主語として示した上で、「これをどうすればよいか」と問い方をするってことだな。

ただし、この形式も「いや、どうしようもない」という反語の意味で用いられることだってあるんだから、気をつけろよ。

でも、さっきも言ったように、疑問ではこの形式が断然多いと思う、ためぐち先生の経験ではな。

「何」が「似る」に近い意味の動詞「若」と共に用いられる「若何^ニ」(若何^ニせん)も、「如何^ニ」と同様に用いられるよ。

また、さっき「A、如^レ之何^ニ」の形式を紹介したけど、「之」を用いずに、「A、如何^ニ」(Aは、如何^ニせん)と表現することもある。ま、いろいろあるわな。

◎ポイント!…「如何」「若何」は、動詞性の疑問を表し、手段や方法を問う。

如^レA何^ニ ・ 若^レA何^ニ ▼Aを如何^ニせん ・ Aを若何^ニせん。

▽Aをどうすればよいか。

A、如^レ之何^ニ ・ A、若^レ之何^ニ ▼A、之^ニを如何^ニせん ・ A、之^ニを若何^ニせん。

▽A(については)、これをどうすればよいか。

A、如何^ニ ・ A、若何^ニ ▼Aは、如何^ニせん ・ Aは、若何^ニせん。

▽A(については)、どうすればよいか。

・ いずれの場合も、疑問以外に反語の意味を表すこともある。

「如何^{いかに}」「若何^{いかに}」と同じ意味を表すものに、「奈何^{いかん}」(奈何せん)があつて、これもよく用いられ、**「Aをどうすればよいか」という意味の場合は、やっぱり「奈^{いかに}A何^{いかに}」(Aを奈何せん)という形をとる。**

え？ なんで「如何^{いかに}」「若何^{いかに}」と一緒に説明しなかったのかつて？

うん、まあ使われ方は同じなんで、それでもよかったんだけどな…

ただ、ためぐち先生としては、「奈^{いかに}A何^{いかに}」が「如^{いかに}A何^{いかに}」と同じ理由からAが間に置かれるのではない可能性を捨てきれないんで、別に扱うわけだ。

どうということかつて？ うん、まあこの「奈」が「如」に通じて同じ意味を表すという説もあるんだよ。でも、違うという説もある。

その説は、「奈」は「何」と同義で、重複して用いられてるというもの。

実際、「奈」単独で「いかにせん」と読む例だつてあるしな。

この説に従えば、「奈^{いかに}A何^{いかに}」は、「Aをどうしてどうしよう」ってことになるんかいな。よくわからんが、なりたちに疑問があるってことで、分けて説明したよ。

吾^{われ}奈^{いかに}無^な箭^{やせん}何^{いかに}。

▼吾^{われ}箭^{やせん}無^なきを奈^{いかに}何^{いかに}せん。

▽私は矢がないのをどうしたらよからうか。

敵が攻めてくるのに備えて、城郭は整備したし、食糧も十分確保したし、武器も十分にある。でも、矢がないという事態に、「どうしたらいいねー」と、趙襄子^{ちやうきやうし}が家臣の張孟談^{ちやうもうだん}に尋ねた言葉だよ。

「奈何^{いかに}」も目的語をとる時は、この例のように2字の間におかれるわけだ。

「如何^{いかに}」と同じだという説に従えば、「矢がないことに対して何に似させるか」となるし、「奈^{いかに}が「何^{いかに}」と同義だという説に従えば、「矢がないのをどうしてどうしよう」となる。

要するに「矢がないのをどうしたらいいか」って意味になるわけだな。

「奈^{いかに}A何^{いかに}」も、動詞性の疑問を表して、「Aをどうすればよいか」という意味を表すんだ。

そして、この例のように、Aは名詞以外に、名詞句が置かれることもあるんだよ。

ただし、「如^{いかに}A何^{いかに}」の時にも述べたけど、「奈^{いかに}A何^{いかに}」の場合も、Aが2文字以上の例は少ない。Aの字数が多いと、やっぱり「如^{いかに}」と「何^{いかに}」の呼応がわかりにくくなるんだらうね。

「奈何^{いかに}」も、「如何^{いかに}」「若何^{いかに}」と同様に、「A、奈^{いかに}之^{いかに}何^{いかに}」(Aについては、これをどうすればよいか)という形をとったり、「之^{いかに}」を用いずに、「A、奈^{いかに}何^{いかに}」(Aについては、どうすればよいか)という形をとることもある。

早い話が「如何^{いかに}」「若何^{いかに}」と同じってことだな。

それなら一緒に説明しろって？ まあ、ためぐち先生のこだわりだよ。

◎ポイント！…「奈何」も、動詞性の疑問を表し、手段や方法を問う。

奈^レA何^{。テ}。

▼Aを奈何せん。

▽Aをどうすればよいか。

A、奈^レ之^{何。テ}。

▼A、之^を奈何せん。

▽A（については）、これをどうすればよいか。

A、奈何^{。テ}。

▼Aは、奈何せん。

▽A（については）、どうすればよいか。

・いずれの場合も、疑問以外に反語の意味を表すこともある。

「如何」「若何」「奈何」が、副詞のように述語を修飾して、「どうして」という意味を表すこともあるぜ。

注意しなければならないのは読み方だ。

この場合は「いかんせん」じゃなくて、「いかんぞ」って読む習慣がある。

若^{キハ}顔淵・伯牛之徒、如何^レ遭^ハ凶^{。ハ}。

▼顔淵・伯牛の徒のごときは、如何ぞ凶に遭へる。

▽顔淵や伯牛などのひと（仁徳のある人）は、どうして禍にあったのか。

この「如何」は「どうして」の意で、「何」では動詞「遭」を連用修飾してる。

これを「どのようにして禍にあったのか？」と訳すと、問いの意味がずれてしまう。

ここは「どうして」の意味だな。

この用法は反語的な疑問文や、反語文でもよく用いられるね。

それとさっきも言ったけど、読み方に注意してくれよ。「いかんせん」じゃなくて、「いかんぞ」って読めよ。

「如何」が「どうして」という意味を表す時は、これも疑問ばかりじゃない、反語の意味で用いられる

ことも多いから注意。

特に「如^レ之^何何^何 A^何」(▼之^{これ}を如何^{いかん}ぞ A せん)の形をとる時は、ほとんどの場合が反語の意味を表すね。

◎ポイント……「如何」「若何」「奈何」が述語を修飾して(＝述語の前に置かれて)、「なぜ・どうして」という意味を表すことがある。

如何^レ A^{スル} ・ 若何^レ A^{スル} ・ 奈何^レ A^{スル}

▼如何^いぞ A する。 ・ 若何^いぞ A する。 ・ 奈何^いぞ A する。

▽どうして A するのか。

・疑問以外に反語の意味を表すこともある。

「如何」「若何」が接続詞「而」と共に用いられて、「どのようにして」という意味を表すこともあるぞ。

若何^い而^{なん}可^{かな}

▼若何^いにして可^{かな}なる。

▽どのようにすればよいのか。

この「若何^い而^{なん}は」、「若何^いが接続詞「而」を伴って、「どのようにして・どのようにすれば」という意味を表してるんだ。

「如何^い而^{なん} A^{スル}」「奈何^い而^{なん} A^{スル}」も同じ意味を表す。

訓読では、この例のように接続詞が「而」の場合、「いかニシテ A スル」と読むのが普通だけど、「いかニスレバ」と読むこともあるね。

また、「如何」が接続詞「則」と共に用いられて、「どのようにすれば」という意味を表すこともある。この場合、なぜだか「若何」や「奈何」が「則」と共に用いられる例は、ほとんど見られないんだな。ってゆうか、このためぐち先生は、1回も見ることがないよ。

国^ハ如何^い則^{すなは}可^{かな}謂^い安^{やす}矣^や。

▼国^ハは如何^いにすれば則^{すなは}ち安^{やす}しと謂^いふべき。

▽国はどのようにすれば安寧と言えるのか。

「如何^{ニスレハ}則^チ」は、接続詞「則^チ」を後に伴って、「どのようにすれば」という条件を表す。

「則^チ」は文字通り法則を原義とするから、「どのようにすれば法則として（こうなるか）」という意味なんだな。

そこから「くば」の意味が生まれてくる。

だから、本当は「いかにすれば」の「ば」が「則^チ」にあたるわけさ。

◎ポイント！…「如何」「若何」「奈何」が接続詞「而」と合わせ用いられて「どのようにして」という意味を表す。

如何^{ニスレハ}而^ニA^{スル}・若何^{ニスレハ}而^ニA^{スル}・奈何^{ニスレハ}而^ニA^{スル}

▼如何^{ニスレハ}にしてAする。・若何^{ニスレハ}にしてAする。・奈何^{ニスレハ}にしてAする。
▽どのようにしてAするのか。

◎ポイント！…「如何」が接続詞「則」と合わせ用いられて「どのようにすれば」という意味を表す。

如何^{ニスレハ}則^チA^{スル}

▼如何^{ニスレハ}にすれば則^チAする。
▽どのようにすればAするのか。

最後に「如何」が名詞を修飾する形にふれておこう。

そもそも「如何」は「何に似させるか？」から「どのようにするか？」という動詞性の疑問を表すようになつたわけだから、「どんな」の意味で名詞を修飾するはずはないんだが、その意味で用いられていると思えない例に、時々ぶつかるんだよな。

文中子^ハ是^レ如何^{ナル}人^ヤ

▼文中子^ハは是^レ如何^{ナル}なる人^ヤぞや。

▽文中子はどんな人ですか。

この「如何^{ナル}」は、どうみても名詞「人」を連体修飾して形容詞性の疑問を表してるとしか思えんな。

「どのようにする人」なんて意味が通らないだろ？

やっぱり「どんな人」って意味だよな。

これはおそらく「如何」と「何如」の形が似ているために、書き写す際に間違えたり、あるいはそれともて用法が混乱したのかもかもしれないね。

だから、形容詞性の疑問を表すはずの「何如」が「如何」の意味で用いられることだってある。現実にもこのような例があって、それかなり頻繁に出くわすんで、「如何」「若何」などが「何如」の意味で用いられることもあるんだってことは、知っておく必要があるね。

ただし、「如 A 何」の形をとって状態や評価を問うことは絶対にならないからね。

さて、疑問代詞「何」が用いられる疑問形について、たくさん説明したんで、消化不良気味かな？でも、なんといっても「何」は疑問や反語を表す時に、もっともよく用いられるものだから、しっかりマスターしてほしいな。

もちろんほかにも疑問を表す代詞は色々ある。

次の時間は、ほかの疑問代詞を紹介しよう。

それまで「何」の用法を、よく復習しとけよ！